

大岡昇平「武蔵野夫人」

——〈恋〉と〈武蔵野〉からみる〈怪物〉の意味——

谷川直美

大岡昇平「武蔵野夫人」（『群像』昭二五・一〜九（八は休載）、昭二五・一一 講談社刊）について、姦通恋愛小説としての意義を検討することは確かに重要である。

しかし、「武蔵野夫人」を「復讐者」の「健康回復の物語」として書いたという大岡の自註は無視できない。なぜならば、大岡において姦通は食人と共に人間の愛情や自制心を信頼し社会復帰し得るかという問題^②を追究するための柱となるテーマであったと見えるからである。例えば、「野火」（初出^①『文體』昭二三・一一、二四・七。②『展望』昭二六・一〜八、昭二七・二 創元社刊）では、「親子であろうと夫婦であろうと、愛なぞあるはずがない」と思う狂人田村が、彼の妻と医師の「媾曳」について、「男がみな人喰い人種であるように、女はみな淫売である」という形で非難と譴念を述べている。

本作で復讐者・勉の社会復帰がどのように描かれたかを考える時、「勉に道子の死を知らせることが、勉を一種の怪物にしてしまふ」と感じて怖れたという結末の意味が問題になる。

先行研究には、勉が「物語の最後」でも「道子の死を知らない」点を重視し、世間の掟が変わるまで心の中で愛情を保とうという「道子の提案した「誓い」を守ることで」、「勉は白日下に「健康回復」への道を歩み進むことができた^③」という見方がある。しかし、この論考では〈怪物〉の意味が十分に考究されていない。

一方、「戦場」という異常な世界を経験してきたものは「何らかの意味で「怪物」という外ないものにならざるをえなかった^④」のだという指摘がある。しかし、〈怪物〉を単に戦場の経験の深刻さに由来するものとして解釈すると、「道子の死を知らせることが」勉を〈怪物〉にしてしまふという意味を十分に理解できない。

〈怪物〉の意味を理解するためには、勉の変容における道子への〈恋〉の意義をより具体的に追究しなければならない。

ところで、以上の先行論は、勉が道徳やそれに基づく「誓い」を守って社会化することを「健康回復」として捉えている。それ

に対し、大井田義彰氏は、「誓い」などの「空虚な言葉」を強いる「社会」を「覆す」「怪物」になることを「健康恢復」と捉えている。ただし、大井田氏も「勉の未来をネガティブに考えるか、ポジティブに考えるかの違い」があると結び、解釈に曖昧さを残している。

そこで、「人間に絶望していたが、自然は愛していた」「二」勉が「工場と学校と飛行場」と「東京都民の住宅」等の人工物によって成る「今の武蔵野」を「新しい基礎」「十三」として認める過程に注目したい。ここで勉が志向した人間らしさを明らかにすれば、〈怪物〉がいかなる意味で非人間的なのかが見えてこよう。本稿は、勉の変容における〈恋〉の意義と勉の〈武蔵野〉の捉え方の関係から結末の〈怪物〉の意味を読み解く。また、それを書いた大岡の意図に注目し、大岡の社会復帰に関する考えにも迫りたい。

一、〈青年〉の〈復員者〉

先行論は勉の人物像について大岡の無垢への共感を注視してきた。例えば田中益三氏は、大岡の「純粋な若者」に対する「関心」が「一連の富永太郎や中原中也に関する著述に」窺え、「そのような面影が勉にはある」と見て、「純粋な精神の持主」に「この作家が共感を寄せているのは確かなこと」だと指摘している^⑥。また、菅野昭正氏は「大人たちの世俗的なエゴイズムや狡猾

に汚染されていない無垢な若者」^⑦が好意的に描かれていると見ている。

一方、大平綾子氏は「勉のもつ破壊力は彼が無垢であるという点と復員者であるという点において分裂している」と捉え、作者がその「分裂」をよく説明し切れていないと批判している。

確かに、「二十四歳の青年」「二」である勉が「大人達に反撥を感じ」「三」る場面などは、彼が何らかの意味で完全には〈大人〉でない〈青年〉であることを提示している^⑧。

しかし、勉の性質は必ずしも十分具体的に検討されてきたとは言い難い。大岡にとつて青年の復員者・勉を描くことは無垢への共感に止まるものであっただろうか。また、勉の〈青年〉としての性質と〈復員者〉としての性質は無垢な面とそうでない面というように単純に対立するものであろうか。以上の問題を意識しつつ、勉の〈青年〉の〈復員者〉としての性質について追究することとする。

まず勉の人物像の設定背景を押さえるべく、大岡が兵士及び兵士の経験を引きずる復員者の状態を〈子供がえり〉として捉えていた点に注目したい。例えば、「武蔵野夫人」の初刊と同月に発表した「歩哨の眼について」には「死ぬという義務を負わされ」る代わりに「衣服・食糧・住居を与えられ」る「兵士」は、「親によって扶養され」る「少年」と「正確に同じ状態にあ」ったと書いている。さらに昭和二八年には「自分の生命を提供するかわりに、生活は全部軍がまかなってくれる」という経験によつて

二、勉における〈恋〉の意義

それでは、〈恋〉は勉にどのような変化をもたらしたのか。

復員して間もない頃の勉の「女学生達との交際」は「集団婚に近いもの」であり、「男の学生は屢々女を交換し別に嫉妬も起きなかった」が、勉は「楽しくなかったから」「それがちつともいいものだとは思っていないかった」「三。勉は、相手を交換可能な肉体的欲望の対象としてのみ捉える関係に否定的感情を抱いていたのである。ただし、その時の勉は「まだ妻を含めて、あらゆるものを所有しようという欲望のない年齢であった」。

しかし、道子への〈恋〉を意識した勉は、「あの人の愛が秋山を棄てるだけ強いか」「確かめ」たいと思い、「彼女が同じ優しさを秋山にも注いでいる」ことに「焦立」「六」つ。勉は、〈恋〉により、相手の愛情を独占したい欲望を覚え、全く所有欲のない「二十四歳」という〈青年〉の上限を暗示的に超え始めたのである。

それでもなお、生計に無頓着な〈青年〉の〈復員者〉の態度は根強い。勉は、実母の夫が「情事のために職を失い」、二人の生活が困難に陥っているのを知った時、初めこそ「道子との恋の将来のことを真剣に考えずに、ただ現在の中途半端な感情に酔っている自分が馬鹿に見え」「六」たというが、結局将来の生活を具体的に考えない。

勉の思考の特徴は、道子に拒否された時、「世界中の夫が憎くなる」「七」、憎いのはあの人にそんなことを思わせた秋山だ。彼奴によって代表される夫というものの全部だ。世の中だ」「十三」と考えている点にも窺える。ここには、道子の頑な態度や秋山の存在といった彼の〈恋〉の個別具体的な問題に関する不満を漠然と「世の中」全部に結び付ける勉の性急さ、飛躍しがちな考え方が表れている。

〈恋〉の不満の原因を漠然と人間社会全部に帰して人間社会を憎む勉は、「村山のホテルで自分に働いた抑制を、あらゆる行動を奪われた復員者の意識に課せられた抑制の習慣の結果と考えた」。これに対し、語り手は「行動を欲しながら、実はそれを回避している自分の、一種の自己欺瞞にすぎない」「九」と批判する。勉の躊躇は、勉が「女友達とした行為の対象として道子を考えるには」「彼女を尊敬しすぎていた」「五」というような、道子に対する彼固有の感情にも由来する。人間不信を深刻化させていた勉にとって道子が重要なのは、単に道子が道徳の体現者であるからではなく、「道子が今自分のことを思ってくれるただ一人の人である」「五」からなのだ。

つまり、勉における〈恋〉は、彼にとって特別な道子の愛情を独占したいという欲望を含み、勉が所有欲を持たないことを特徴とする〈青年〉のままではいられなくなる契機であった。しかし、勉には、〈青年〉の〈復員者〉の態度を根強く持ち、〈恋〉の欲望の不満の原因を漠然と人間社会全部に帰して人間社会を憎む

側面がある。語り手はその勉の性急で飛躍しがちな考え方を批判している。

また、勉は「共産主義の本を読一み、「道子の拒否」を「単に人妻という社会的条件の結果」「九」と捉える。やがて勉は「共産主義を標榜」する「青年達」が「必要」を強調して、自己の退屈を正当化している」ことを「滑稽」「十三」に思う。「戦争の実際を見た」勉は「人間の行為に「必要」では律し切れないものがある」と考え、「恋を主張」するために「必要」から成り立っている社会の部分を無視してもかまわないはずだ」と思う。勉は「必要」を人間の行為を律する条件として意識し、その条件を疑うところから彼の姦通の正当性を考えようとしたのである。

この勉の思考の意味を捉えるべく、「必要」の意味を考えたい。管見では当時大岡が共産主義に傾く青年達をどのように見ていたかを直接示す資料は無いが、当時の共産主義の流行や大岡の発言を合わせて検討することで本作の「必要」の意味は見えてこよう。

まず共産主義における「必要」と言えば「各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて！」というスローガンが想起される。勉は「剰余価値説から唯物史観に至る通俗解説書」「九」を読んでいるが、例えば向坂逸郎「資本論解説」は、「売り買いを通じてのみ」生産物が各人に届く今の資本主義社会の次に、「米、布、本、ペン、機械、肥料等々一切の社会の必要物が、予め計画的に生産され、必要に応じて分配される」社会が到来する

と解説している。

勉に話を戻せば、「取水塔」から取られた「水」が「東京の家庭へ配られる」ことを「東京都民の「必要」と捉えている。したがって、「必要」は人間が生活を営むために欲するものとひとまず言える。

これを念頭に置き、次の大岡自身の註より、本作執筆時の大岡の共産主義に関する考えをpushきえておきたい。

僕は知らず識らず「存在が意識を決定する」という定式一つによって書いた、古いマルキシスト小説家と同じ誤謬に陥っていたわけです。いかにも社会的経済的条件は歴史を決定するかも知れない。しかしそれは人間行為の総和の結果として決定するのであって、存在がいちいち個人の心理を決定するという風には働かないのです。¹⁶

右の「存在が意識を決定する」という定式」は、マルクスの『経済学批判』における次の記述を念頭に置いたものだろう。

人々は、その生活の社会的生産において、特定の、必然的な、彼らの意思に依存せざる諸関係を結び、この生産関係は、彼らの物質的生産力の特定の発達段階に応答するものである。(中略)物質的生活の生産方法は社会的、政治的、および精神的の生活過程一般を制約する。人々の意識が彼らの

存在を決定するのではなく、むしろ反対に、彼らの社会的存在が彼らの意識を決定するのである。¹⁸⁾

右の「物質的生産力の特定の発達段階に応答する」「生産諸関係」における位置という「社会的存在」が人間の意識を決定するという理論を、大岡は「存在がいちいち個人の心理を決定するという風には働かない」という意識をもって批判的に取り入れようとしたと考えられる。例えば、「共産主義の本を読ん」で「道子の拒否」を「単に人妻という社会的条件の結果」と捉える勉を、語り手は「若い彼はその条件が必ずしも個人の意志に現われるとは限らないのを知らないだけ」「九」と批判しているのである。

以上を踏まえ、「共産主義を標榜」する「青年達」は「戦争も「必要」から演繹していた」という記述について考えたい。

例えば、当時「目覚ましい」「左翼関係出版物の進出」¹⁹⁾の一つとされた大森義太郎『唯物弁証法説本』²⁰⁾は、「人間は必ず寄り集つて、社会を作つて生活する」が、「社会の土台」は、「手挽臼に相応した生産関係」が「封建君主制」を形成し、「蒸気臼といふ生産手段」の登場が「資本主義社会」をもたらしたというように、「生産力の一定の発展の段階に応じた」生産関係であるという。そして「帝国主義戦争」の根本も発展した生産力とそれに対応できなくなった生産関係の「衝突」にあると解説している。

あるいは「新しい世界」昭和二年一月号で紹介される松本金次郎『マルクス経済学』には次の記述がある。

戦争は資本主義的生産関係の必然的産物である。商品生産、剩餘価値への貪欲、生産力の発展から恐慌、これからの切り抜け策としての海外植民地の獲取、資本の守護者としての軍備、その拡張と軍需産業の利益との一致、戦争的手段への誘引、これらは資本の負はされた運命の道標にすぎない。

このように、当時の唯物史観の解説において、人間は生活の糧の生産力に応じて形成される生産関係を基礎とする社会においてのみ生存し得ると説明されていた。そしてその法則において生じる経済的欲望の必然的産物として戦争があるとされた。

そのように「戦争も「必要」から演繹」する思想に対し、「戦争の実際を見た」勉は「人間の行為に「必要」では律し切れないものがある」と思い、「恋を主張」することを正当と考えたのであった。

つまり、勉が言う〈必要〉は人間が生活の糧の生産力に応じて形成される生産関係を基礎とする社会においてのみ生存し得るという事情がもたらす秩序を意味する。勉は人間の行為にはその〈必要〉に収まらないものがあると考え、彼の姦通を正当化する。

しかし、勉は「取水塔に毒を投げ込めば、東京都民を一挙に鑿殺出来るかも知れないと考え」、「必要」を無視した自分の考えが、こういう兇悪な空想に行き着いたのを見て、「俺はもう人混りの出来ない体かも知れぬ」と「自責」を感じる。「道子さんと

一緒に死んでしまおうか」という考えも「自分勝手な悪い考え」として退ける。

その後勉は、一度「何かの意味があるだろうか」と疑った「心だけを保って世間の掟の変るのを待つ」「十一」という道子の「誓い」にも「意味があるかも知れぬ」と考え直し、次のように思う。

どうにも改めることの出来ない社会に対して、或いはそうしてまず自分の心の方から定めていくのが、生きる道かも知れぬ。

つまり、勉は彼の姦通を正当化するべく共産主義が言う「必要」を引き合いに出してそれを無視しようと考えていたが、その態度を殺人に繋がるものとして否定するに至った。他者の生を軽んじない思いと彼自身の責任を意識した勉は、彼が「必要」を無視しないで生きるための糧として道子との「恋」を捉え直す。「存在がいちいち個人の心理を決定するという風には働かない」という大岡の考えを反映するように、あくまで個人的感情の問題に基づいて「必要」と向き合う勉の姿が描かれているのである。

《青年》の《復員者》としての態度を改めなければ生き続けられない段階に来た勉は、彼自身の固有の《恋》を、所有欲や性的欲望の赴くに任せるのではなく、むしろ《必要》を無視しない

で「人混り」する―他者と共生する甲斐として意志的に位置づけるようとした。勉は、大岡が言う「生きるために働くという大人の営み」に近づき始め、兵士―《復員者》の《子供がえり》から脱しつつある。

その後、勉は遠くに見える道子に会いに行くべきか迷い、「今ここで降りて行ってしまつては、俺の唯一の生甲斐とした『誓い』の意味がなくなる」、「後で話せばきつと褒めてくれる」と考え「我慢」する。勉は、「誓い」を守ればその分道子の愛情を得られる《恋》を「生甲斐」として、「必要」を無視せず他者と共生できるようにしようとした。そのため、「衝動」を自制し、「来ていい時、あたし手紙あげるわ」「十一」という道子との約束に固執したのである。

三、勉が《今の武蔵野》を捉えた意味

先行論では、勉において自然が「道子を示すもの」としてみられる²³点指摘されている。また、「勉の自然を見る目には」「兵士の目」と「少年の目」が「重なっている²⁴」と述べる論考もある。

しかし、《恋》によって態度を変化させてきた勉が《今の武蔵野》に関心を持つに至る意義については未だ検討の余地がある。

大岡自身は本作の自然描写に関して「国木田独歩の『武蔵野』に挑戦するつもりがあった」と述べ、「ナラヤクヌギ林の山林とこの村の入会場でタキギを取るために植えた²⁵」ものだと武蔵野

の自然が人の生活の資源として生産されたものである点に触れている。

独歩の「武蔵野」は「北海道の様な自然そのまゝの大原野森林とは異て」、「生活と自然とが」「密接して居る」点が「武蔵野第一の特色」だとして、人の生活の様子を含む景色の美を重視している。

一方、大岡の「武蔵野夫人」は、生活のために自然を開発する人間の営みそれ自体を問題にしているのではないか。

本作の第一章によれば、土地の人が「湧水を忘れた」のは「今は鑿井技術が発達して到る処井戸があり、湧水の必要は薄れたから」であつた。また「窪地の正面を蔽う広さの全部が、今は生垣によつて占められ」ているからでもあつた。

つまりこれは近頃とみにこの辺に増えた都会人の住宅の一つであつて、道行く人はこの垣の中に、かつてこの土地の繁栄の条件であつた湧水があろうなどとは思わない。

右の記述は「悠大な自然の時間と卑小な人間生活の時間」を「対比」しているだけではない。「井戸」や「都会人の住宅」のような、人間が生活を豊かにするために造つた物が、それが登場する前とは全く異なる環境を造り出している点を強調しているのである。

また重要なのは、第一章の最後の次の記述である。

時々この（注・道子と大野の）二つの家を訪れる金と食物に疲れた都会の人達は、この激しい世の中にこんなんびりした天地のあるのに或いは呆れ、或いはがっかりして帰つて行つた。（中略）人はこういうところでは樹まで新鮮な色を保つのかと訝つたが、それが栗の花にはかならないと聞かされてまたがっかりした。栗は都会に近いこの土地の農民の有利な資源で、到るところにその下地の湿つた林がある。

武蔵野の栗林の起源は、桜井芳郎氏によれば、江戸時代に「新田百姓の協力で幕府御用栗林を仕立てた」ことにある。すなわち、武蔵野新田は元来「水気が薄く、一たび日照りがつづけば忽ち凶作となり」、「風水害などもすくなくなつた」ので、「栗実を將軍家へ献上して、残余は御用に参加した新田村々に夫食足し合ひとして配当」する制度を築いたという。また例えば、享和元年（一八〇一年）の公文書「御栗林植継方書附」は、「風除けの木と、老木した栗とを伐採して植え替へる必要がある」ことを述べている。

したがって、「武蔵野夫人」は、農民が生活の維持や向上のために工夫してきた歴史を暗示する「栗」が「はけ」の辺りの「到るところ」にあることを語つていと言へる。

本作は、《武蔵野》が、実は「金と食物」による「疲れ」と無縁の天地ではなく、人間が生活のために意志的に開発し管理してきた結果としてあることを前提として提示しているのである。

以上を踏まえ、勉の〈武蔵野〉の捉え方について追究したい。

復員した勉が焼跡を見てまず感じたのは、石と土に還元されたそれら人間の住居地域に露呈した太古の地形であった。

右のように、「戦場で人間に絶望していた彼は、すべてを自然に換算して感じた」「九」。すなわち、復員直後の勉は焼跡に「太古の地形」を想像するなど、現実の人間の世界と距離を置きたいという思いから自然を見ていた。そのように「人間に絶望していたが、自然は愛していた」「二」勉は「幼時から見馴れた木立」に惹かれる。

榎、杉、樺など、宮地老人の土地の背後を飾る樹々は淋しい少年であった頃、彼の最も懐かしい映像であった。

ここで「榎や樺の太木は古代武蔵野原生林の残物である」「二」ことに注意したい。勉は、継母が来てから「一家の余計者」「二」とされていた少年時に「淋しさ」を慰めてもらったのと同じように、古代から人間の力に関係なく存在する自然を眺めることで、戦争で強めた人間に対する絶望を慰めようとしていたのである。

しかし実際、勉には「人事（人為）的観点から」自然を見ている面もある。「熱帯の山林を独り彷徨したことのある彼は、自由がいかにも怖ろしいものであるかを知っている」「四」たという。

「山林に自由存す」と歌った明治の詩人（「独歩」）にとつて「快い緑の諧調」であった「柵欄」も、勉には「薪の材料としか映らない」。勉には戦場で究極の孤独を知った反動として募らせた人間の営みに対する関心もあつたのである。

このように、勉は、戦場で知った孤独の反動から人間の営みへの関心を持ちながらも、意識の上では、人間とは関係なく存在する自然を眺めることで人間不信に陥つた心を慰めようとしていた。

その後、勉は、「自ら意識することが案外重大な第一歩」となる〈恋〉——「一種の文明の産物である恋愛」「五」を発展させる。その過程は、〈武蔵野〉の開発と呼応するように描かれているのである。

例えば、勉と道子が狭山丘陵を散策する場面には「二人でゆっくり歩くのは、二人がまだ恋を意識しなかつた頃、野川を遡つて以来である」「八」とある。本作の第一章によれば「野川を遡つて古代多摩川が武蔵野におき忘れた」「二名残川」であった。つまり、二人が野川を遡つた場面は、未だ〈恋〉という「文明」を築いていない勉と道子の様子を、古代より人間の力とは別個に存在する自然の描写と呼応するように語るものであつた。

それに対して、狭山丘陵の場面では、勉と道子が「都市計画的造園の中」や「人工の湖」の周辺、あるいは「露骨な都市計画的美観によつて作成された桜の並木」を散策する様子が描かれる。そこで勉は、「昔のわけ隔てのない親しさが」「戻つて来るように

感じ」、「ひたすら幸福に酔っている」た。しかし、二人の唇は「自然に合わさ」り、勉は「自然に或る動作を抑えることが出来」ずに道子の体を開こうとして思い止まるという事態に至る。

この狭山の場面は、人間が意志的に生産し管理している自然と呼応するように、勉と道子において、「わけ隔てのない親しさ」から相手を特別な個人として意識的に愛するという「一種の文明」へと変化した〈恋〉——つまり人間の意識が介入した後の自然と言うべき〈恋〉が発展せざるを得ないことを示唆しているのである。

さらにホテルでの一件の後、勉は「少年の時からいつも慰めと幸福の映像であったあの木立が、今は不満と怨恨のそれとな」[九] ったと思う。〈恋〉という「文明」を発展させた勉は人為の加わっていない自然に慰めを得る「少年」に返ることが困難になったのである。

その後、勉は、「必要」を無視して殺人を空想し、「俺はそんな悪人なのだろうか」、「俺はもう人混りの出来ない体かも知れぬ」[十三] と悩んだ末に、「武蔵野」を次のように見る。

あれほど人がいう武蔵野の林にしても、みんな代々の農民が風を防ぐために植えたものじゃないか。工場と学校と飛行場と、それから広い東京都民の住宅と、それが今の武蔵野だ。／自分の地理学的迷妄を打ち毀しながら、勉はいつか死の幻想からも逃れて行つた。俺のような者でも、どうしても生き

て行きたいとすれば、すべてそういう新しい基礎から出直さねばならぬ。

ここで、勉が「武蔵野の林」を「代々の農民が風を防ぐために植えたもの」として見たという記述は第一章における栗林の記述と対応する。また「東京都民の住宅」も、冒頭で土地の人に湧水を忘れさせる理由となった人工物として語られていた。

つまり、勉は、〈今の武蔵野〉に表れている、意志的に自然を開発し管理することで生きるための環境を造るという人間の生き方を、彼自身が他者の生を否定する「人混りの出来ない」思想を改めて生きるための「新しい基礎」として認めたのである。

その時、勉は、彼自身の意識が築く「文明」である〈恋〉を抛り所とし、所有欲や肉体的欲望に身を任せるのではなく、「必要」を無視せず他者と共生できるようにしようと志したのであった。

このように、勉が彼の意思によつて築く「文明」＝〈恋〉を抛り所として「青年」の〈復員者〉の態度を改め社会に生きること、人間が生活のために意志的に開発し管理してきた環境として〈武蔵野〉があるという前提と呼応する形で目指されたのである。

四、大野の怖れと〈怪物〉の意味

愈々、勉が〈怪物〉になることを大野が怖れたという結末につ

いて、大野の位置を押さえ、これまでの考察と総合して考える。

まず大野には批判的に描かれる側面がある。例えば「元來坊ちやん風の猪突主義が、戦時中からの放漫経済と偶然マッチしただけ」彼の商売は行き詰まって「家計が崩壊」「十」する。そこで大野は富子に「愛情の保障を行為で求め」、それは「殆んど強姦の形を取った」という。しかし、語り手曰く「妻を犯す権利」は「妻を扶養する夫の権利」「十」としてある。この前提によれば、大野が富子を十分に扶養できなくなった上に、それによって生じる彼自身の不満を解消する策として「嫌がる妻を犯す権利を行使」したというのは、大野が富子との夫婦関係において彼自身の責任を果たさずに不当に権利を行使したことを示す。

一方、秋山が「彼自身と富子の家庭生活を否定するのに都合のいい」原始社会の集団婚の話を引き合いに出して一夫一婦制を否定した時、大野は「そんなら秋山さん、道子さんを……貝塚君に貸してあげられるかね」「二二」と問うていた。大野は、妻が他の男性と交際することを夫が快諾できない現実には秋山よりは自覚がある者として描かれているのである。

さらに最終章の道子の死後の場面には次のように書かれる。

しかし彼（＝秋山）はこの時となつても、道子があくまで勉のために死ぬのだと確信し、自分が棄てたために死んだとは気が附かなかつた。／講義の題目たる文学に囚われていたこの学校教師は、いつまでも人生の外にいた。／大野は家の

中での妻の扱いについては人生の外にいたが、出奔した妻の扱いについては人生の内に入った。息絶えた道子の死顔を見て、彼自身の知らぬ感情に、ただ涙を流している秋山の口から、「すまなかつた」の言葉と一緒に洩れた富子の行く先を聞くと、彼はすぐうろろしている雪子を連れて外へ出た。

右の通り、まず秋山が「文学に囚われていた」と評されている。秋山は「姦通の趣味」を「スタンダール耽読によって涵養」「二二」し、「自分が富子と結婚した後の日常の生活の困難を少しも考え」ず、「二つの夫婦の別れる困難に想到しなかつた」「二二」からである。続けて、秋山が道子の自死に対する責任を遂に自覚しないことは「いつまでも人生の外にいた」という表現をもって批判されている。つまり、「人生の外にいた」という表現は、秋山が生活の現実や彼自身の責任について自覚しないことを批判する表現である。

同様に考えれば、大野は「家の中での妻の扱いについて」批判されている。この語り手の批判は、大野が富子との夫婦関係において彼自身の責任を果たさずに不当に「嫌がる妻を犯す権利を行使」したことなどに向けられていると考えられる。

その上で、大野は「出奔した妻の扱いについては人生の内に入った」と評される。大野は、秋山の態度及び大野自身の「家の中での妻の扱い」との対比において、富子との夫婦という役割関係を維持しようと行動する責任感を評価されているのである。

以上のように夫婦関係を維持しようとする大野の社会性は語り手を通して肯定的に提示されているが、その背景には大岡自身の社会復帰を目指す思いが関わっていたであろう。

例えば、「武蔵野夫人」連載の翌年三月に発表した「愉快な連中」⁽²⁹⁾には、「内地で集団的に戦争に堪えた友人達は」「人に同情することを知っていた」が、「私」は「身一つしか守るものなく、事実それだけを守って来た戦場の経験の結果」「非情」を身につけていたとある。この「私」の「非情」は、前線で利己主義を身につけ、「戦争は楽です。自分一人の命さえ守ればいい。駄目だったら死ぬだけ」「九」と話す勉の場合と重なる。しかし大岡は、「私」の「非情」の話を初出時より「遠いむかしの話である」と締め括り、大岡自身を「人に同情する」社会性を恢復した者として示そうとしていた。

このように自らを社会で生き得る者として捉え示すことは、大岡にとって「自分を正当化しているのに、いや気がさす」⁽³⁰⁾と反省されるものでもあった。しかしそれは、大岡が自己の欲望次第で相手を裏切ることのない人間関係の存在を追究し、日常社会における人間関係を今一度信じて生きる術を求めていたことを示唆する。そのように考えれば、秋山に比べて自己の生活の現実や責任を自覚する大野の社会性が肯定的に書かれた点には、大岡自身の願望が反映されていたと考えられる。

その「富子を連れて出て行く大野」の背中に「社会」を見た勉は、「姦通なぞをもって」「押し破る」べきではないと考える。

この前の場面で、勉は富子に応じて「人妻の体を知っ」ていた。富子の体は「もう人間とは思われない」「酔った体」と表現され、勉に富子の意志や理性を感じさせないことが示唆されていた。勉はその「体」が「彼が馴れていた女学生達のそれと少しも違わないことに気が附いた」。つまり、勉は「人妻の体を知」ることが、本来「ちっともいいものだとは思っていなかった」⁽³¹⁾、「三」、相手を交換可能な肉体的欲望の対象としてのみ捉える女学生達との交際と全く同じであると実感したのである。

結末部の勉の姦通否定は、相手を特別な個人として意識する関係を大切にしたいという、彼の体験から得た感情に基づくのである。

一方で、勉は「社会」を「押し破る」には「一度ビルマで死んだ自分の命を賭ければいい」という思いも捨て切れない。勉は、苦勞をしても〈必要〉を無視しないで他者と生きようとする意志を棄て、彼の不満の原因を漠然と人間社会全部に帰してその全部を憎む思いも完全には拭い去れないのである。その性急な考えが突き詰められた時には、「取水塔に毒を投げ込」むような、彼の不満と直接関係の無い者への殺意もあり得よう。「その時、道子との「誓い」はどうなる」と「絶望」もする彼は、ギリギリのところまで、道子との「誓い」に衝動を抑える意味を見出そうとしていたのである。

以上を総合すれば、大野が「勉に道子の死を知らせることが、勉を一種の怪物にしてしまうことだけは感じ」て「怖れていた」

という結末の意味が見えてこよう。

〈怪物〉とは、〈青年〉の〈復員者〉としての態度を克服し、〈必要〉を無視しない努力をしなければ生きられない段階に来た勉が、苦勞をしてでもそうして他者と共生する甲斐があると信じさせてくれる「唯一の生甲斐」を失い、彼の不満の原因を漠然と人間社会全部に帰してその全部を憎む、非人間的存在になることを暗示する否定的比喩である。ここには、利己主義でない人間関係の実現を信じ切れず、〈生きるために働くという大人の営み〉を行えない兵士―〈復員者〉の〈子供がえり〉を克服出来ない可能性に対する大岡自身の不安が窺える。

しかし、大岡は、勉が〈怪物〉になる可能性を夫婦という社会的役割関係を維持しようとする大野の内心の怖れとして語るに止めた。これは、大岡が、深刻な不安を抱えながらも、〈子供がえり〉の克服を諦めたわけではないことを示唆している。

結び

道子の兄が二人共「二十四歳」で死んだという設定と、勉が道子への〈恋〉によって相手の愛情を独占したい欲望に目覚めるという展開は、勉が、所有欲を持たず、生計に無頓着である〈青年〉のままでは生きられないことを示していた。また、戦場で得た利己主義を掲げ、苦勞をしてでも生きることに意味を認めない〈復員者〉としての態度も、語り手に「怠け者」の態度として批

判されていた。

その勉の態度を変容させたのは、彼が「自分のことを思ってくれるただ一人の人」として信頼する道子を彼にとつて特別な個人として意識的に愛する「文明」Ⅱ〈恋〉であった。勉は、人間が生活の糧の生産力に応じて形成される生産関係を基礎とする社会においてのみ生存し得るといふ事情がもたらす秩序Ⅱ〈必要〉を無視しないで他者と共生することの甲斐を〈恋〉に見出そうとする。この過程は、勉が、少年時のように古代より人間の力に関係なく存在する自然に慰めを求めめるのを止め、〈今の武蔵野〉に表われている、意志的に自然を開発し管理することで生きるための環境を造るといふ人間の生き方を志した過程と呼応していた。

以上より、大野が「勉に道子の死を知らせることが、勉を一種の怪物にしてしまうことだけは感じ」て「怖れていた」という結末の意味が理解される。〈怪物〉とは、〈青年〉の〈復員者〉としての態度を克服し、〈必要〉を無視しない努力をしなければ生きられない段階に来た勉が、苦勞をしてでもそうして他者と共生する甲斐があると信じさせてくれる「唯一の生甲斐」〈恋〉を失い、不満の原因を漠然と人間社会全部に帰してその全部を憎む、非人間になることを暗示する否定的比喩なのである。

ただし、勉が〈怪物〉になる可能性はあくまで社会に生きようとする大野の怖れとして語るに止められた。この結末は、大岡が、人間不信を吐露しつつも、よく言われがちな小児的無垢への共感に止まるのを善とせず、兵士―〈復員者〉の〈子供がえり〉

を未熟さとして批判し、その克服を諦めていなかったことを伝えている。

註

- (1) 大岡昇平『武蔵野夫人』の意図(原題「私の処方箋―武蔵野夫人」の意図について)、『群像』昭25・11)
- (2) 後年、大岡は『野火』はフィクションで、ぼくは人間食ってないんだというの、ぼくが日本の社会に許容される条件」と発言している(石原吉郎との対談「極限の死と日常の死」、『終末から』昭49・6)。
- (3) 花崎育代「戦後の出発―俘虜記」「武蔵野夫人」「野火」(花崎育代『大岡昇平研究』、双文社出版、平15・10。初出は『国文目白』昭59・2)
- (4) 松元寛『武蔵野夫人』と『野火』を包む文学空間(松元寛『小説家大岡昇平』、東京創元社、平6・10。初出は『函車』平4・4)
- (5) 大井田義彰「大岡昇平『武蔵野夫人』考―二種の怪物」をめぐる―(『学芸国語国文学』平10・3)
- (6) 田中益三『武蔵野夫人論』(『日本文学誌要』昭58・7)。特に道子の兄が「二十四歳」で「肺結核」のために亡くなっていることは富永太郎を彷彿とさせる。
- (7) 菅野昭正「情熱恋愛の心理とその行方」(菅野昭正『小説家 大岡昇平』、筑摩書房、平26・12)
- (8) 大平綾子「武蔵野夫人論」(『日本文学論叢』昭54・3)
- (9) 例えば、花崎育代「(永劫回帰)を超えて―武蔵野夫人」(『大岡昇平研究』(同註(3))。初出は『昭和文学研究』平4・2)は、ジャン・コクトー、大岡訳「永劫回帰」のパトリスが二四歳であることとの関連性を指摘している。一方、金延妹「大岡昇平の『武蔵野夫人』」(『帝京国文学』平7・9)は、二四歳が「スタンダールの『パルムの僧院』のファブリスと『赤と黒』のジュリアン・ソレルを連想させる」と述べている。
- (10) 「彼が大人になってから道子が彼のために泣くのを見るのはこれで二度目」「五」という記述もあり、勉が見方によつては既に「大人」であることも示されている。
- (11) 大岡昇平「歩哨の眼について」(『文芸』昭25・11)
- (12) 大岡昇平「わが主人公―武蔵野夫人」の「勉―」(『読売新聞(朝刊)』昭28・9・12)
- (13) 大岡昇平『野火』の意図(『文学界』昭28・10)
- (14) 引用は、マルクス(訳者不詳)『ゴータ綱領批判』(ナウカ社版テキスト全書14、昭23・5。原著:Elementarbücher des Kommunisten, Band 12, Marx-Engels, Programmkritiken, 1891)に拠る。このテキストの版は作品内時間より後になるが、「武蔵野夫人」発表より前である。
- (15) 向坂逸郎『資本論解説』(北斗書院、昭21・4)。
- (16) 同註(1)。

- (17) カール・マルクス(猪俣津南雄訳)『経済学批判』(彰考書院、昭21・11。『九二四年版』訳と記されている)
- (18) 『日本出版年鑑 昭和22・23年版』(日本出版共同株式会社、昭23・11)。
- (19) 大森義太郎『唯物弁証法読本』(黄土社、昭21・12、昭22・5再版)。ただし、大森は上部構造が下部構造に影響を及ぼし得る点にも注意を払うよう促している。
- (20) 北添忠雄「読書案内 経済学入門書」(『新しい世界』昭22・11)
- (21) 松本金次郎『マルクス経済学』(彰考書院、昭22・4)。
- (22) 野田康文『武蔵野夫人』における間テクスト性の問題―「誓い」に織り込まれたスタンダール『パルムの僧院』(野田康文『大岡昇平の創作方法』、笠間書院、平18・4。初出は『比較文学』平12・3)は、「誓い」について、「副次的な手段であった、(手紙をあげるまで来ない)ということが独立して意味を担いはじめる」点がスタンダール『パルムの僧院』の本歌取りであると指摘している。
- (23) 同註(3)。
- (24) 張偉『武蔵野夫人』論―自然・欲望・社会―(『昭和文学研究』平8・3)
- (25) 大岡昇平・埴谷雄高(対談)『二つの同時代史 IX『武蔵野夫人』のころ』(『世界』昭58・3)
- (26) 国木田独歩『武蔵野』(原題「今の武蔵野」、『国民之友』

明31・1〜2。引用は『定本国木田独歩全集(増補版) 第二巻』(学習研究社、平7・7)に拠る。

- (27) 片岡美有季「大岡昇平『武蔵野夫人』論(下)」(『立教大学日本文学』平24・7)が「鑑賞用の樹木を植えた」りする宮地老人に自然を「ありのままの姿で保存しようとする意識がみられない」と指摘しているのは示唆に富む。
- (28) 大原祐治「地図と痕跡―大岡昇平『武蔵野夫人』論」(『千葉大学人文研究』平27・3)
- (29) 桜井芳郎「武蔵野新田御栗林―武蔵野市井口家資料による―」(『武蔵野』昭57・5)
- (30) 「御栗林植継方書附」(武蔵野市編『武蔵野市史 続資料 編六 井口家文書三』(武蔵野市、平3・3) 所収)
- (31) (無署名)「御栗林の運営」(小金井市誌編さん委員会編『小金井市誌Ⅱ 歴史編』、小金井市役所、昭45・10)。
- (32) 同註(3)。花崎氏が引用している本文は次の通り。
道が歩く人の努力の節約の跡を示して、斜面の裾の自然の形をなぞっているのが、美しく思われた。〔四〕
- (33) 第四章の最後、道子は勉と遡った川の源が「恋が窪」と名付けられていることを知り、「恋に捉えられた」と思う。「恋」とは宛字らしかった」といい、道子における「恋」の自覚は、人が自然に名前や伝説を付与して意識してきた歴史に連なるように描かれている。
- (34) 大岡昇平「愉快な連中」(『小説新潮』昭26・3)

(35) 大岡昇平「忘れ得ぬ人々」(『別冊文芸春秋』昭28・6)

(36) 花崎育代「社会的感情」の彷徨―「野火」(『大岡昇平研究』(同註(3))。初出は『国語と国文学』平5・7)は、「社会的感情」の破碎の苦しさを味わせた田村」に「結局は「黒い太陽」しか見せない」「野火」の結末に大岡の「自己正当化の苦衷」が表れていると指摘している。

(37) 『俘虜記』の一篇「戦友」(『文学界』昭24・3)には、「メデューズ号の筏上の悲劇は非難し得ないが」「贅沢から」比島人を食した日本の将校は「非難されねばならぬ」、「占領地の人民を人間と思わない」「戦場の習慣」が「彼の裡の人間を抹殺するところまで進んでいるとすれば」「これは一個の怪物」だとある。これは相手を人として尊重せず、自己の生命維持に要する分を超えた欲望のために使う態度を批判した表現であり、「武蔵野夫人」の「怪物」が否定的意味で非人間性を表していることの傍証となる。

※大岡昇平の著作の引用は全て『大岡昇平全集』二三巻別巻一(筑摩書房、平6・10、平15・8)に拠る。引用中の旧字は新字に改めた。／は改行、「」内は筆者による註、「」は作品の章番号を表す。特に意味内容を追究したい語には〈 〉を付した。

(たにがわ・なおみ 本学大学院研修生)